

# 詩

石内秀典  
尾崎与里子  
山本英子  
選

特選

## 知らない風

野瀬町

水沢

郁

白人にも黒人にもアボリジニにも朝鮮民族に

も生まれてこなかった

だからときどき

自分が混ぜご飯の具のひと切れに思えてしま

まう

ぼくはぼくに生まれた

でもそれは

ほかの生を受けなかっただけのことだ

ぼくは自分のこともまだよく知らないけれど

ぼくが生まれてこなかった

何百億の命に分け入って

土のトンネルを掘ってみたり

昆布の林をすり抜けてみたり

懐かしい匂いを嗅いでみたり

こんにちとはと挨拶してみたり

ひいおじいさんにもななちゃんにも生まれてこなかった  
だから昔のこともななちゃんの考えていることもよく分からない

そうして

初めての駅に降り立ったときみたいに

胸がどきどきして

肌がひりひりして

知らない風に吹かれて

(評)

『いのち』の根源についての原初的な問いを、やさしい言葉で生き生きと表現された感性の鋭さに感服しました。終連「風に吹かれて」にポップ・ディランをおもいました。



# 砂漠の蕾

南川瀬町

横谷沙智

棘のない薔薇のような夢など見たくないわ  
生命の花を咲かせる事に全てを賭ける者達の  
喜びだけでなく苦しみも胸に刻みたいから

肌を刺す向かい風はその身をさらう程に  
吹き抜けるから心まで連れ去られそうだろう  
それでも不倒を貫こうとする時風向は変わる

豊かな泉を知らずに生きてきた砂漠の蕾よ  
深い闇の中で閉ざしていた光を解き放て  
誰かの色に染まる事に迎合してしまうよりも  
孤独を選ぶ強さにエールを送る瞳が在るよ

誰にでも等しく分け与えられないものの  
理不尽さに強い憤りを覚える時もあるだろう  
ただと天に唾を吐いても太陽は微笑まない

手を伸ばせば届くものだけを集めていけば  
傷つかないけれど運命に背きたいのなら  
理性の盾で抑えてきた情熱を矛にすればいい

豊かな泉を知らずに生きてきた砂漠の蕾よ  
日が昇るのを待たずして自らが夜明けとなれ  
誰の足跡もない道を行くのは心許ないけれど  
直向きな背中抱くように恵みの雨は降るから

(評) 生の絶対的な孤独についてきわめて真摯  
なまなざしで表現し、自らを奮い立たせる  
ような初々しい感性に惹かれました。「自  
らが夜明けとなれ」にエールを送りたいと  
思います。

# きいろい罨

西今町

やまかみ まさよ

うちがお嫁に来たときから  
咲いてたのよ  
一枝どうぞ と差し出された  
切れ長の目元した美しい女ひとから

あなたと私が往き来するのは  
香りと 淡い想いにさそわれて  
ひと言ふた言 交わすことのは  
お久しぶりね お元気？  
お茶でもいっぶく どう？

玄関に行きつくまでの  
左手には白壁の蔵が建ち  
手近かな高さに 楚楚として咲く  
臘梅のつぼみに足を止める

この冬の寒さの中  
物想いにしむ私の気持ちも  
包み込んであたりまで よわせる  
陽だまりにだまって佇む

(評)

ごく自然な冬の情景と、ささやかな隣人との会話が何気なく書かれています。その中に重い引っかけが潜んでいます。人はいつもながしかの屈託を抱えて生きています。そのことをきいろい臘梅に寄せて寡黙に表現した著者の力量に脱帽しました。

## 幼い時へ

古沢 町

真野 美栄子

はちみつを 口にすると

ほのかな甘さが 遠い日へ 道案内

民話なのか 一休さんのトンチ話か

和尚さんが 水瓶の中は毒 ぜったいふれない事 そう 小僧さんに言い置き 外出

そんな風に始まる 絵本が思い出され

いつしか 話の続きが 映像化しはじめ

そのむこうに くつきり

床に臥せている父が…… 父にくつき

甘え遊ぶ七才頃の私も 映し出されていく

父の薬くさい布団も何故か 大好きだった

そのにおいまで 感じられる程に……

台所の戸棚に 今までなかった ビン

トロツとした 美味しそうな色合いの物

何かな 何かな 手にとってみる

すかさず 母が

それは父ちゃんの 見舞いに頂いた

高い葉やで あんたらは あかんで

いつになく きつく諭された

母の留守の時

父が戸棚から あの高い葉の入ったビンを開

笑いながら 手招きし パカッと蓋を開け

箸の先にまきつけるよう からませ

これは はちみつだ みつ蜂が作った蜜だ

ほらアーンしろ どうだ 甘くうまいだろ

父はよく 昔話を 父の経験話をしてくれ

幼い私に先の夢をたずね 絶対元気になる！

約束の指切りげんまん 何度もしたのに

今だったら 薬となった はちみつなら

どれだけでも 逆に父の口へ 運べるのに

いつの頃からか

はちみつは 常に手の届く所に

口にすると 気持ちもトロツ 懐かしい日へ

はちみつに 甘さの中で父に

見守られているのかな

(評)

なつかしい父の思い出への情感が甘いはちみつを通してよみがえります。幸せだった幼い日々が温かく丁寧に書かれています。でも好感の持てる作品に仕上がりました。



入選

## 発表会

正法寺町

高井

豊

わたしは 出演者と  
ピアノにも 拍手を送っている

(評)

ピアノは手を触れると生き物になるとい  
う着想が読者にあたたかい気持ちをお届け  
下さいました。ピアノと奏者との交歓が愛  
情豊かに描かれていて美しい。

ひとが 手で触れたとたんに  
ピアノは  
生きものになっている

指先に 思いを寄せて弾き始めると  
心の動きと一体に  
音を産み出していく

幼い者には やさしく付き添い  
ほのぼのと 祈りをこめている

全身に力を入れ  
自分のものにして打つ少年には  
驚くほどの音声を  
ひたすら差し出す  
はるかな風景を滲ませ  
物語まで 共に豊かに転換させて  
濃密に ゆさぶられているのが見える

演奏が終わるたび



入選

## 漁港の残景

東近江市

前川 利孝

祖先はきつと狩猟一族だったのでらう  
今突堤で偶然釣り上げた魚が  
魚籠の中で跳ねた  
興奮した血潮が私の体の中でたぎった

今朝も早くここ小さな漁港の一日が終わった  
漁獲物の陸揚げと積替えの終わった船着き場  
人も居なくなり

太陽は高く上がり

陽射しは日差しと交差して乱反射を繰り返す

干潟ではマテ貝が潮の流れに吹かれて

地下から這い出し

砂浜の中から頭を出す

その舌はちらちらと動き

潮と共に移動する

生きる為

食を得るために

ウミネコの群れが共に喜び泣きをしながら

目の前の捨てられた小魚を漁る

入選

佳作

釣りに飽いて

ベンチに横たわりうとうとして居た私には

小さな子供が近寄って来て伝える

車置き場が閉まりここから出られなくなる

## 粒子

犬上郡豊郷町

藤田 始 宏

佳作

## 春のま昼ま

馬場二丁目

清水 はる

(評)

海の匂いが流れてくるような丁寧な描写に確かな筆力を感じます。漁港の一日の終わりの一抹の淋しさが胸に届きます。

とても遠いところに来ている

旅の間に様々な風景を見てきた

—何が見える?—

森が見える

—どんな?—

暗闇の中に光がさしている

—どうするつもり?—

森の中に少し歩いていきたい

森を抜けると湖に出る

ボクははるばるここへやってきた

空気の中の何かボクを包む

肩にふりそそぐ朝の粒子

吐く息が白く震えた

## グラジオラス

岡 町

宮地 正子

佳作

## 猫とわたし

日夏 町

成宮 恵津子

佳作

## お別かれ

戸賀 町

四ツ門 信夫

佳作

## 娘の手

芹橋二丁目

楠 亀 美恵子

(評)

澄み切った空気の中では粒子が見えます。作者もまた粒子を抱えながら旅をしているのでしょうか。不思議な高揚を覚えます。



## 《総評》

沢山のご応募ありがとうございます。今年は厳しいコロナ禍のなかでしたが、皆さんの書くことへの意欲は決して落ちることが無いのだと思うことをあらためて実感しました。毎年思うのですが応募下さった作品にはお一人お一人の生活が、人生がいっぱい詰まっています。それらを言葉にしようとして見ようという思いはかけがえのないものと思います。そのことでおそらく自らを振り返り、そして前への展望が見えてくるのだと思います。心して読ませていただきました。『もしも言葉に沈黙の背景があれば、言葉は深さを失ってしまうであろう』とある哲学者が言っていますが、私たちの言葉の背後にはこれまで抱えてきた人生が深く積み重なっているのだと思います。

石内 秀典

## 選者詩

### 沖、鎮魂の

石内 秀典

およそ海を見る事のなかった少年の  
たった一度の遠足の  
海の絵は  
沖であつた  
ただ海原に一本の  
青い線  
海の果ては  
一文字の静けさ  
踏み込めば遠ざかる  
とどまれば静まりかえる  
沖には  
泡立つ海があり  
時に無言の風ぎの日がある  
長い年月の終わりに  
たどり着いた  
沖という無防備な場所のざわめき  
年月をたどり直すことを拒否し  
沖は  
すぎ去るものと  
とどまるもの  
うづくまる場所  
時と空とが重なる  
沖は  
私の中にいつもある

### 鏡の向こうで

尾崎 与里子

森の美容室は ひっそりと開いていた  
重なりあう樹々の木洩れ日を受けて  
想い出の鏡が 遠い緑を映し込み  
鏡を持った美容師の 刃先の触れ方が  
ひどく研ぎ澄まされて 美しい  
右は長めに左は短く 耳の上は刈り上げて  
昨日までの私のすべては 鏡の向こうで  
みんな 消えかかっているのかもしれない  
老いた髪をふんわり揺すり  
小さな白いマシユマロになって考える  
仕上がった髪を左右にひっぱると  
ゆがんだ雫が 無数のきらめきになる  
間違っていた かもしれないし  
間違つてなかった かもしれない  
鏡の向こうに 転がり落ちたあの日から  
私は 一面に散らばっていった  
数えきれない転がるマシユマロになって  
取り違えは なぜか楽しかった  
赤の女王も 白の女王も  
今は みんな一緒に つむじを振って  
鏡の向こうの 懐かしい子守唄をうたう  
むぼうびなまま すぎてった♪  
おくびょうなまま すぎてった♪  
まちがったかもしれないね♪  
まちがったかもしれないね♪  
まちがったかもしれないね♪

## サインブック

山本英子

だれにも会わなかったと私はどうしてもいう  
ことができなかつた

事実は坂道のどこでも決してだれにも会わ  
なかつたのだけれど

「そう」とその人はいった

それから響く声でつけ加えた

「どうもありがとう」

だれにも会わなかったと私はいうことができ  
なかつた

「いいえ——に会いました」と私はいった

「そう」とその人はいった

それから透きとおる声でつけ加えた

「どうもありがとう」

「いいえ——にお会いしました」

まばたきもせずに私はその時その人にその人  
の名を告げたのだ

むごい陽射し降る中 まっ白い帽子をかぶり

ワンピースの背ファスナーをかたくしめて

ひとすじに坂道を下りてゆく燃えるかなしい

その人を見たとき私は目の前の人といったのだ

「そう どうもありがとう」

私はその人をその日限りに知らない けれど

今なおその人は ふと顔を上げて問う

清潔な方程式の解法を私に教え終えた後で

「だれにも会わなかつた？ あの坂道で」と

